横屋秀子詩集

花の冬

版所究研画墨

横屋秀子

詩集冬の花

冬の花　目次

わがうたを
海師走
郷愁
冬の襲ひ
冬の花
寒菊
蝶
をりづる
きりぬき
森林の詩
ひぐらし
秋

をんな
ある日の犬
すべてを
生きもの
俗體
落陽
深秋
澁柿
山脈
淺間晩秋
からまつ林
靜かなるさなかに
落葉

海師走

裝幀　奥村土牛

わがうたを

既に潮干て海のおどろ杳けれど
わが叫びただれたる喉に悶え
わが念ひは汀に飛び散らふ白き紙片か
舊き灰濁の空貝に默座せるわが孤獨よ

けふ海邊の花のかげもなく
缺片なる貝に砂の冷たきをもれば

こぼれ落つ
わが鬱悒のくりうたのみぞ

あはれいとほしきこの身をば
潮濡れし黝き砂に沈めてむ
身を沈み　身を沈み
あはれいとほしきわがうたを呼び戻してむ
水脈杳く
ちりぢりに　ちりぢりに
波と碎け散りにしわがうた

海師走

あはれ師走の濱のこの堪へがたさよ
とばりなす蒼空の一角を衝き
風よ荒むか　礫もてわれをひた擲つか
そのしろく温かき胸に
この潰えし身をば沈めばやと
泪たれつゝ來しわれを
はだかあしくちづけしわが蹠(あなうら)を

傷つくるは黝きしろき殼貝か

ああ　かつてわれ
小さき卷貝なる蕊にひそみ
温(ぬく)き日のあをさの苑まろびつつ
まろびつつ紅き薄貝と語らひたりしが

げに失はれしもののかなしみのとらへがたさか
うたてき巷のなかにそのかみのこころ忘れ
むなしきおごりに染めたるこの身の忌はしさよ

かくまで潰れに潰えし身よ
されば こそ哭きつつはきぬこの濱
さはあれど鞭うちのかくも堪へがたきか

われを擲て　礫よ
われを倒せ　風よ
さなり
わがいつはりの崩折るるまで

鄉愁

はなびらのやうなうす貝にひそみ
吹きすさむ潮風をしらず
ころころと渚の菌(しとね)を
まろびたはむれてゐたわたし

とあるひと日
桃いろの爪で貝をおしあけ

ぬけだしたわたし

春が逝き夏がきて
春がきて夏が逝き

いま
はなびらのやうなうす貝の思慕をもとめて
灰いろの爪をこの砂にかきたてるわたし
貝はどこへいつたらう
わたしをうちたたく潮風のなかで

あの日のやうに
幼いわたしをひそめて
うす貝はどこをまろんでゐるのだらう

冬の襲ひ

冬の襲ひ

冷たい冬がくる
ひとりかきたてた情火に
ひとりあたたまつてすごす
冷たい冬がそこまできた

泪の珠が凍り
ひとり炎やすなさけも盡き

他人の床に凍つた泪ともども
灰になつてゆく冬の夜が

冬の夜がくる
ひりひりと

冬の花

花も葉もすべてをふりすて
根にたてこもり
冬をこらへる草
その耐忍の姿の美しさ

足もとを嚙む霜ばしら
頭上に荒むこがらしを

必死で耐へるかれら
きらびやかな花瓣の衣裳も
みどりしたたる安逸も
そこにはない

そこには
冬を越すことをしつてゐる草のきびしい悲願の崩しがこもる

寒菊

つめたい透徹の月
しろいみぞれの夜
その夜のつぼのなかにおまへとゐる
根を斷たれて久しいおまへとゐる

私の無形のつぼみは斷たれた根をもとめて漂つてゐる
冬枯れにもまれた感情をどこまでもちこたへられるか

薄氷の針のやうなわれめの交叉の一點でおまへは小首かしげてもの
おもひするか
こごしい花辨たち
その眞白さが　根を斷たれて澁滯した私の澱んだ目を刺しとほる

もとの根につかまらうとする私のあがきのはげしさを嘲笑ふおまへ
ではない
おまへは鎭靜のきはみにたたずまふ言葉なき道で私を射る

蝶

わたしはぶるつとくびをすくめる……。
春淺い午後にしてはつよすぎる風が、こんくりいと塀を灰色に吹きつける、すこしばかりはやめに覺醒めてしまつた眞黑の大きな蝶は、もはや飛ぶちからもなく翅をひろげたままに、冷たい塀の足もとにつつぷしてゐる。

わたしの頰を冷たくよぎり……。

春淺い午後にしてはつよすぎる風が、蝶のその細いひげを、折れよとばかり叩いてゆき、翅は難破した船の黑い帆の如く、いたいたしくはためいた。

蝶よ、おまへはあまりはやくに生れついて來てしまつたのではないのか……。おまへはこのやうな痩弱い季節の精ではなかつたはず。おまへは眞夏の熱氣のうちに狂ひ飛ぶ生きものではないのか。

わたしもまた、おまへの如くよりはやく生れすぎたのか……。さうではないとすれば、おまへは過ぎ去つた夏にこそ飛び交ふべき生

命だつたのかもしれぬ。ならば……わたしにも、時はすでに遅い
のか。わたしのよるべき時は、すでに粉碎されてゐるのに。いま
だに過去を忘れ得ぬおろかさ。

をりづる

苦いくすりのつつみ紙を
もてあそんでゐてふと幼い日がよみがへり
わたしは病みつかれたゆびで
鶴を折らうとした

けれどぬぐひつづけた泪の濡れゆゑに
杏い日の手なぐさみを忘れはて

蝶のおとす粉にも似たくすりを含みのこした
四角い紙で
わたしのゆびは小魚のやうにためらひがち

ものういまひるが逝き
佗しい夕べのうすやみに
ふたひらのくすりの紙が
しろくのみ浮いて
鶴はたためない

夜のうつろに
灯のともつたころ
わたしのやせたゆびは
そのあかいひかりに幼い日をよび起し
鶴はちいさな翅をつけて
脊にさむざむとしわよせて
わたしのまくらべにとまつた

すでにつかれをみせたその翅をつまみ
吐息そそげば

鶴は白い花粉をちらしてふくらむ

杏い日のゆめを織りこんだ
なつかしいそのまろみ

きりぬき

こころひとつのおもい旅路のはてで
あたしはちいさな紙きれから
愛(かな)しいさまざまな繪姿をきりぬく

かほのいろ褪せて
はさみのさきをみつめる目のくもるとき
なきじやくりながら眉をひそめ

こころこまやかに繪姿を追ふ

いつか
きむづかしいあたしのかなしみは
いろ美しい繪姿にさそはれ
そのほほゑみは
あたしのなみだをぬぐひ
にほひほのかな文箱には
ぬけだしたさまざまの繪姿が
なぐさめのやうに身をよこたへ

あたしのひざには
つきぬきりぬきのむくろの片々が
繪姿のうしなはれた空白を
どうしてうづめようと
さびしい苦惱にこころみだれてゐる

ひぐらし

森林の詩

黄昏の吐息のなかに
黙々と森林よ
おまへは眠るのか

梟が叫んでゐるぢやないか
おまへの咽喉笛にすわりこみ
虫けらから獸まであらゆる生きものが

情慾の嵐に熱くなつてゐる
おまへのもつれた髪のなかで
その足もとで
ねぐらへ辿りつかないうちに盲ひた
鴉が
おまへの頭のてつぺんで
嘆息してゐる

大地をば足下にふまへ
逞しくその體軀を

天空にふるひあげた森林よ
あらゆる生きものの
汚辱と昏迷と激しいその禱りのなかに
息づくものよ　森林
暗黒をさらに闇で塗潰さうと叫ぶ梟も
夜の寂寥に寂寞を重ねる盲ひた鴉も
あるひは痴情に身を焦くけだものも
すべてはおまへである
すべてはおまへの
血であり肉であり骨であり

おまへの世界である

森林よ
そのふてぶてしい世界をかかへて
眠れ
闇に眠れ
昏々と眠れ
卑小な俗光を求めず
眠れ　昏々と
黄昏のなかに

月夜の深更に
曉の闇に
森林よ
暗くともおまへ自身の世界を抱へたままで

いま
おまへの頭上を蝙蝠が輪をかいてゐる
衛星のやうに

ひぐらし

夕やみをこめて嫋々としかもするどくあがるさけび
西の空　ちいさくなごりがてにしろく
東の空の匂ひは暮れ

沈默はわたしをつつみ
そのあゐいろの苞を　あの叫びがやぶる
まぢかではない　しかもよわよわしい

またしばし　ひぐらしは默し
わづかになきつづける
とほい東のくらい空のしたで

ひぐらしは　たそがれをたたへるいのち
ひぐらしは奏でる　夜のむかへうた
夕ぐれをかなしむために
なぜ西へとばない

あかつきをもとめて
東へさすらふひぐらしよ
やがて　夜はしらむ
あせらずとも
默してまてば

秋

秋なれど
芥の舟浮べ巷に澱む堀割の
濁りのいろは變らざり

風冷たき暗澹の夜半ぞ
芥の床に腹這へる蕊の腐れし花はみたり
かたへにちろと炎えなやむ蒼き光を

腐れし花のかたはらにともる焰は
そも水脈杳く流れ惑ひし夜光の虫の眸か
はた魚骸の燐の火か
あらず
あらずそは捕はれの身をこの濁水に
甘きを求め落ちし仄かなるほたる火なり
芥運る舟人黝き大き掌に
ほたるにぎれど躊躇ひぬ

風冷たき暗澹の夜半ぞ

巷の奢りの犧牲負ひて
あはれ舟人が芥まみれの掌に
翅萎えしほたる火は消えぬ

これは芥の床の廢れし花が夢みたる
夢か現か
芥の舟浮べ巷に澱む堀割の
濁りのいろ變らざり
げに　秋なれど

落陽

をんな

誰がいつたのか
むかしから
をんなはよわいものと
いはれてゐたが

をんなはよわいゆゑ
信ずるにあつく

終の日の
はるかな神秘のきはみをまで
豫知する

ある日の犬

犬よ
おまへのかなしげなめつき
笑つたことのないめつき
おまへはいつはることを
しらない

すべてを

すべてを
すなほにうけいれよう

ちいさな
ちいさな羽虫が
わたしの手の甲を
するすると走つた

音もたてず
わたしはつぶした
赤いしるしが
ちらばつてゐた

生きもの

蠅　吐きたいやうな眞晝すぎ、蠅取り紙がぶらさがつてゐるのに、
どうしておまへたちは、私の厨物にばかりたかるのだ。

夏虫　人間が灯を消してしまつたので、火取虫は、月に對つて飛び
立つた。

俗體

私の企てた城は日毎に崩れてゆく
日毎に
私自身は
私を理解せざる人々へと傾いてゆく

落陽

眞晝寢の夢から目醒めた心許なさ
限りないふしあはせを
落ちてゆく太陽のいろにみる
身をつつむ何もかもとり捨てたい

東の空に虹がかかつてゐるが
私からはとほい兆なのだ

山

脈

深秋

柿澁を嚙み耐へつ嚙み耐へつ吾が
高原ゆく汽車のながきに耐へぬ
玻璃まどの暗きにひた倚れば
目にやどすなにはなけれど
瀬の音は轍より速き

柿の澁味はひつ味はひかへしつ

山は秋　秋の深みのきはまりて
吾が身内にこもり
身内にこもる
高原なるほとり降りたちゆきしひとよ
吾れをば殘きて

柿澁の齒列には　そのからまれど
吾脣は褪せざらめやも
囁やきて去りにしひとに
夜の汽車は高原をゆきぬ

吾が頬のみを
玻璃まどにおきて

澁柿

ざつくりと噛んで澁かつた
ざつくりと噛んだ唇をすぼめるな
澁かつたとおまへはしつたのだ

山脈

虚しい言葉でなにがいへませう
あなたをいなむでゐたわたしを
蒼空につらなる豊かさで
抱いてくれたあなた
むしろそれ故にさみしいあなたのいろ
むしろそれ故にさみしいあなたのほこり
なぜあなたは繰展げるのです

性悪しきわたしの目に
なぜあなたの全裸を織り込むのです
あなたのその完璧な裸形で
わたしは息をつめられたのです
ああ　あなた
信濃の山脈よ

淺間晩秋

どうしてあなたは踵をおかへしにならないのです
しよせんあなたを愁ひに閉ざすばかりのわたしを
それは慘酷といふものです
そんなわたしであるゆゑに
あたたかい胸につつんでくださるのは
せめて
せめて冷たい山風のひと吹きに

わたしの項(うなじ)を晒してくだされば
ああ　わたしはとことこと
海への道をくだるのですが
しかも　わたしはしつてゐます
とことことあなたを遠ざかる
わたしの目に溢れるものの在處(かりか)まで
しつかりと掴んで放さない
あなたの仄かな掌の温もりを

からまつ林

何故に
あの山脈
からまつ林
散りしく落葉　には
空虚な生活がないのでせう
妖異しい感情がないのでせう
歪んだ知性がないのでせう

あなたのその素朴な奥ぶかさは
誰に強ひられたのか
誰にも強ひられない
太古よりそのままのあなたの姿だ

汚濁の巷の青泥から
はじめて脱てみた金魚は眸を落します
おのれの鰭の裝ひのむなしさに

靜かなるさなかに

明日としなれば消え去らむ
たまゆらのいのちを紅と染めなして
しろき胸に憩ふか赤とんぼ
明日としなれば朽ちゆかむ
たまゆらのいのちを綾に織りなして
ほろほろと落葉は髪にふりかかる
ああ　風が吹き荒むのは

風が吹き荒むのは
今日も昨日もはた明日も
絶えもせで永らへるこのこころのみ

落葉

そのひとひらで
わたしの唇口を閉ぢてください
そのひとひらで
わたしの目を覆つてください
わたしは聽くのです
あなたの跫音を
あなたの跫音を　ただ

詩集冬の花

横屋秀子

昭和十九年二月二十日印刷　昭和十九年三月一日發行　著作者兼發行者横屋秀子（東京都杉並區高圓寺一ノ五一二）印刷者鍋田久吉（東京都小石川區大塚坂下町一九四）印刷所雄文社（同上）發行所墨畫研究所（東京都芝區田村町三ノ一神山ビル）

頒價貳圓